

安全データシート (Safety Data Sheet)

— オルソクレゾール —

1. 化学品及び会社情報

化学品の名称: オルソクレゾール
 製品コード: JAIA-05
 供給者の会社名称: (日本芳香族工業会会員会社)
 住 所:
 電話番号:
 緊急連絡電話番号:
 ファックス番号:
 メールアドレス:
 推奨用途及び使用上の制限:

2. 危険有害性の要約

GHS分類		1)
物理化学的危険性:	自然発火性固体	区分外
健康に対する有害性:	急性毒性(経口)	区分3
	急性毒性(経皮)	区分3
	皮膚腐食性・刺激性	区分1
	眼に対する重篤な損傷性・眼刺激性	区分1
	発がん性	区分2
	特定標的臓器毒性, 単回ばく露	区分1 (中枢神経系、呼吸器、心血管系、血液系、肝臓、腎臓、膵臓、脾臓)
	特定標的臓器毒性, 反復ばく露	区分3 (麻酔作用) 区分1 (中枢神経系、心血管系、血液系、呼吸器、肝臓、腎臓)
環境に対する有害性:	水生環境有害性(急性)	区分2
	水生環境有害性(長期間)	区分外

※ 記載のないものは「分類対象外」または「分類できない」。

GHSラベル要素

絵表示:



注意喚起語: 危険
 危険有害性情報: 飲み込むと有毒
 皮膚に接触すると有毒
 重篤な皮膚の薬傷及び眼の損傷
 重篤な眼の損傷

発がんのおそれの疑い
 眠気又はめまいのおそれ
 中枢神経系、呼吸器、心血管系、血液系、肝臓、腎臓、膵臓、脾臓の障害
 長期にわたる、又は反復ばく露による中枢神経系、心血管系、血液系、呼吸器、肝臓、腎臓の障害
 水生生物に毒性

注意書き:

【安全対策】

使用前に取扱説明書を入手すること。
 すべての安全注意を読み理解するまで取り扱わないこと。
 この製品を使用する時に、飲食または喫煙をしないこと。
 取扱い後はよく手を洗うこと。
 保護手袋／保護衣／保護眼鏡／保護面を着用すること。
 屋外または換気の良い場所でのみ使用すること。
 粉じん／煙／ガス／ミスト／蒸気／スプレーを吸入しないこと。
 環境への放出を避けること。

【応急処置】

飲み込んだ場合:直ちに医師に連絡すること。口をすすぐこと。
 無理に吐かせないこと。
 皮膚(または髪)に付着した場合:直ちに、汚染された衣類をすべて脱ぐこと。皮膚を流水/シャワーで洗うこと。
 皮膚刺激が生じた場合:医師の診断／手当を受けること。
 汚染された衣類を再使用する場合には洗濯すること。
 眼に入った場合:水で数分間注意深く洗うこと。次に、コンタクトレンズを着用していて容易に外せる場合は外すこと。その後も洗浄を続けること。
 吸入した場合:新鮮な空気のある場所に移し、呼吸しやすい姿勢で休息させること。
 気分が悪い時は、医師の診断／手当を受けること。
 ばく露又はばく露の懸念がある場合:医師の診断／手当を受けること。

【保管】

施錠して保管すること。
 常温では固体であるが、気温が高い場合には液体になる可能性がある。

【廃棄】

内容物や容器を、都道府県知事の許可を受けた専門の廃棄物処理業者に業務委託すること。

3. 組成及び成分情報

化学物質・混合物の区別:	化学物質
化学名:	o-クレゾール(o-Cresol)
別名:	2-ヒドロキシトルエン(Hydroxytoluene)
化学式:	CH ₃ C ₆ H ₄ OH (分子量 108)
CAS番号:	95-48-7
官報公示整理番号:	クレゾール (3)-499(化審法) o-クレゾール 4-(10)-150(安衛法)
濃度又は濃度範囲:	o-クレゾール 99%以上
分類に寄与する不純物及び安定化添加物:	情報なし

4. 応急措置

クレゾールの作用は激しいため、一刻も早い応急措置と医師の手当を必要とする。また、症状が遅れて現れることがあるので経過観察が必要である。

応急措置者は保護具を着用しオルソクレゾールとの接触を避ける。

- | | |
|-------------------------------|--|
| 吸入した場合： | <ul style="list-style-type: none"> ・被災者を新鮮な空気の場所に移す。 ・呼吸停止または呼吸が弱い場合は人工呼吸を行う。(衣類を緩め気道を確保する) |
| 皮膚に付着した場合： | <ul style="list-style-type: none"> ・汚染された衣類、靴などを速やかに脱ぎ捨てる。 ・多量の水または石けん水で十分に洗い落とす。さらに15分間流水による洗浄を続ける。 ・ポリエチレングルコール(分子量300)又はアルコールとの混合物が直ちに使える場合は、洗浄前に脱脂綿に浸してぬぐい取るとよい。 |
| 眼に入った場合： | <ul style="list-style-type: none"> ・清浄な流水で最低15分間眼を洗浄する。 ・洗眼の際、眼球とまぶたの隅々まで洗浄する。 ・コンタクトレンズは固着していない限り取り除いて洗浄する。 |
| 飲み込んだ場合： | <ul style="list-style-type: none"> ・無理に吐き出させない。 ・水で口の中を洗わせる。水を飲ませて胃の中のクレゾールを希釈させてもよい。(牛乳が入手できれば水を飲ませた後に与えてもよい) ・意識がない被災者には、口から何も与えてはならない。 |
| 予想される急性症状及び遅発性症状の最も重要な兆候及び症状： | <ul style="list-style-type: none"> ・吸入時、灼熱感、咽頭痛、咳、頭痛、吐き気、嘔吐、息苦しさ、息切れ、意識喪失の急性症状あり。症状は遅れて現れることがある。 ・皮膚に吸収される可能性がある。(発赤、ざらつき、痛み、水泡、皮膚熱傷) ・眼に触れると、発赤、痛み、重度の熱傷がある。 ・経口摂取すると、吐き気、嘔吐、腹痛、灼熱感、めまい、感覚麻痺、頭痛、又は虚脱、意識喪失などがある。 |
| 応急措置をする者の保護： | <ul style="list-style-type: none"> ・応急措置の際、救助者は自分の皮膚に触れたり、眼に入らぬよう注意する。 |

5. 火災時の措置

- | | |
|--------------|--|
| 消火剤： | <ul style="list-style-type: none"> ・小火災：粉末消火剤、二酸化炭素、泡消火剤、乾燥砂 ・大火災：散水、泡消火剤 |
| 使ってはならない消火剤： | <ul style="list-style-type: none"> ・火源へ直接に棒状注水 |
| 特有の危険有害性： | <ul style="list-style-type: none"> ・燃焼生成ガスは有害な一酸化炭素を含み刺激性がある。 ・加熱により容器が爆発するおそれがある。 ・加熱により蒸気が空気と爆発性混合気を生成するおそれがある。屋内、屋外又は下水溝で爆発の危険がある。 |
| 特有の消火方法： | <ul style="list-style-type: none"> ・火元への燃料源を断つ。 ・消火作業は風上から行う。 ・周囲の可燃物設備を散水して冷却する。 ・移動可能な可燃物容器は安全な場所へ移す。 |
| 消火を行う者の保護： | <ul style="list-style-type: none"> ・消火作業は適切な保護具(自給式呼吸器、防火服、防災面等)を着用する。 |

6. 漏出時の措置

人体に対する注意事項、 保護具及び緊急時措置:	<ul style="list-style-type: none"> ・風下の人を避難させ、漏出場所から人を遠ざける。 ・ロープ等を張り関係者以外立入禁止とする。 ・作業は適切な保護具(8. ばく露防止及び保護措置の項を参照)を着用し、風上から作業する。
環境に対する注意事項:	<ul style="list-style-type: none"> ・付近の着火源となるものを速やかに取り除く。 ・側溝、下水、河川に流出しないように注意する。
封じ込め及び浄化の方法 及び機材:	<ul style="list-style-type: none"> ・危険でなければ漏れを止める。 ・漏洩物を掃き集めて密閉可能な容器に回収、後で廃棄処理する。 ・吸収したものを集めるとき、きれいな帯電防止器具を用いる。
回収:	<ul style="list-style-type: none"> ・少量の場合、固化あるいは吸着(吸着材、土砂、ウエス等)させ密閉可能な容器に回収する。 ・熔融状態で漏洩した場合、土嚢等で流れを止め冷却固化してから密閉可能な容器に回収する。この場合、河川などに少量でも排出しないように注意する。
二次災害の防止策:	<ul style="list-style-type: none"> ・すべての発火源を速やかに取除く(近傍での喫煙、火花や火炎の禁止)。

7. 取扱い及び保管上の注意

取扱い	
技術的対策 (局所排気・全体換気):	<ul style="list-style-type: none"> ・『8.ばく露防止及び保護措置』に記載の設備対策を行う。
安全取扱注意事項:	<ul style="list-style-type: none"> ・火気注意。 ・接触、吸入又は飲み込まないこと。 ・眼に入れないこと。 ・この製品を使用する時に、飲食又は喫煙をしないこと。 ・取扱い後はよく手を洗うこと。 ・屋外又は換気の良い区域でのみ使用すること。 ・環境への放出を避けること。 ・容器中の凝固物の溶解は、湯浴中で徐々に加温する。直火または70℃以上の加温を行ってはならない。
接触回避:	<ul style="list-style-type: none"> ・『10.安定性及び反応性』を参照
衛生対策:	<ul style="list-style-type: none"> ・この製品を使用する時に、飲食又は喫煙をしないこと。 ・取扱い後はよく手を洗うこと。
保管	
適切な技術的対策:	<ul style="list-style-type: none"> ・消防法の規定に従った技術的対策を取る。 ・保管場所には危険物を貯蔵し、または取り扱うために必要な採光、照明及び換気の設備を設ける。
安全な保管条件:	<ul style="list-style-type: none"> ・酸化剤から離して保管すること。 ・容器を密閉して換気の良い場所で保管すること。 ・施錠して保管すること。
混触危険物質:	<ul style="list-style-type: none"> ・『10.安定性及び反応性』を参照
安全な容器包装材料:	<ul style="list-style-type: none"> ・消防法及び国連輸送法規で規定されている容器を使用する。

8. ばく露防止及び保護措置

管理濃度:	5 ppm(クレゾール異性体混合物)
許容濃度:	日本産業衛生学会勧告値(2016年度): 5 ppm (22mg/m ³) 皮膚吸収性 ACGIH(2016年): TLV-TWA 20mg/m ³ (IFV) 皮膚吸収性
設備対策:	<ul style="list-style-type: none"> •取扱いについては、できるだけ密閉された装置、機器または局所排気装置を使用する。 •取扱い場所の近くに洗眼器、シャワーを設け、その位置を表示する。
保護具	
呼吸用保護具:	•防毒マスク(有機ガス用)、送気マスク、空気呼吸器
手の保護具:	•保護手袋(耐薬品性)
眼の保護具:	•保護眼鏡、ゴーグル
皮膚及び身体の保護具:	•保護長靴(耐薬品性)、防災面、保護服、保護前掛

9. 物理的及び化学的性質

2),3)

外観(物理的状态、形状、色など):	常温で無色ないし白色の固体	
臭い:	石炭酸臭	
臭いの閾値:	データなし	
pH:	データなし	
融点、凝固点:	31°C	
沸点、初留点:	191°C	
引火点:	76°C	
蒸発速度:	データなし	
燃焼性(固体、液体):	データなし	
爆発範囲:	下限 1.3%	
蒸気圧:	33 Pa(25°C)	
蒸気密度:	3.7(空気=1) (NITE 計算値)	1)
密度:	1.05 g/cm ³	
溶解度:	水に対して 2g/100g(20°C) 有機溶剤(アルコール、エーテル)に可溶	
n-オクタノール/水分配係数:	log Pow=1.95	
自然発火温度:	555°C	
分解温度:	データなし	
粘度(粘性率):	データなし	

10. 安定性及び反応性

反応性、化学的安定性:	•通常の取扱い条件においては安定である。
危険有害反応可能性:	<ul style="list-style-type: none"> •強酸化剤と激しく反応する。 •空気や光にばく露すると黒ずむ。 •金属を腐食する。
避けるべき条件:	•日光、空気
混触危険物質:	•酸化剤
危険有害な分解生成物:	•燃焼すると分解し、有毒で刺激性のフェュームを生じる。

11. 有害性情報

1)

急性毒性(経口):	ラットの LD50 値として、121mg/kg(ATSDR(2008)、NTP TR550(2008)、NITE 初期リスク評価書(2007)、環境省リスク評価書第 5 巻(2006)、SIDS(2001)、EHC 168(1995))、1,350mg/kg(環境省リスク評価書第 5 巻(2006)、ACGIH(7th,2001))の 2 件の報告がある。区分 3 と区分 4 とに、それぞれ 1 件ずつ該当するが、LD50 値の最小値が該当する区分 3 とした。
急性毒性(経皮):	ラットの LD50 値として、620mg/kg (環境省リスク評価第 5 巻 (2006)、SIDS(2001)、EHC 168(1995))、620-1,000mg/kg(NITE 初期リスク評価書(2007))、ウサギの LD50 値として、890mg/kg(ATSDR (2008)、NTP TR550(2008)、NITE 初期リスク評価書(2007)、環境省リスク評価第 5 巻(2006)、EHC 16 (1995))、890-1,380mg/kg(SIDS (2001))、890-2,000 mg/kg 以上(NITE 初期リスク評価書(2007))との報告がある。分類ガイダンスに従い、最も多くのデータが該当する区分 3 とした。
急性毒性(吸入:蒸気):	データ不足のため分類できない。なお、ラットの LC50 値(1 時間)として、 $>1,220\text{mg}/\text{m}^3$ (4 時間換算値: $610\text{mg}/\text{m}^3(=138\text{ppm})$)との報告(PATY (6th, 2012)、環境省リスク評価第 5 巻(2006))がある。飽和蒸気圧濃度(325.8ppm (=1.44mg/L))の 90%より LC50 値が低いので、ミストを含まないものとみなした。この LC50 値からでは、区分 2、区分 3、区分 4、区分外のいずれかを特定できないので、分類できないとした。
皮膚腐食性及び 皮膚刺激性:	ウサギの皮膚に本物質を適用した試験で、強度の刺激性及び腐食性がみられたとの報告が複数ある(EHC 168(1995)、NITE 初期リスク評価書(2007)、PATY(6th,2012))。また、本物質は皮膚に対して腐食性を示す(SIDS(2001)、環境省リスク評価第 5 巻(2006))との記載がある。以上より、区分 1 とした。
眼に対する重篤な 損傷性又は眼刺激性:	ウサギに本物質の 33% 溶液を適用した試験で、持続性の角膜混濁と血管新生がみられたとの記載がある(NITE 初期リスク評価書(2007))。また、本物質はウサギの眼に対して強度の刺激性又は腐食性を示す(SIDS(2001)、環境省リスク評価第 5 巻(2006)、DEFGOT vol. 14 (2000))との記載がある。以上より、区分 1 とした。
呼吸器感作性又は 皮膚感作性:	データ不足のため分類できない。
生殖細胞変異原性:	ガイダンスの改訂により「区分外」が選択できなくなったため、「分類できない」とした。in vivo では、マウスの優性致死試験、マウス及びラット骨髄細胞の小核試験、マウス骨髄細胞の染色体異常試験でいずれも陰性である(NITE 初期リスク評価書(2007)、環境省リスク評価第 5 巻(2006)、SIDS (2001)、ATSDR(2008)、DFGOT vol.14(2000))。In vitro では、細菌の復帰突然変異試験、哺乳類培養細胞のマウスリンフォーマ試験、ラット培養肝細胞の不定期 DNA 合成試験で陰性、哺乳類培養細胞の染色体異常試験及び姉妹染色分体交換試験で陽性、ヒト細胞では姉妹染色分体交換試験陰性の結果となっている(NITE 初期リスク評価書(2007)、環境省リスク評価第 5 巻(2006)、SIDS(2001)、DFGOT vol.14(2000)、ATSDR (2008))。以上より、in vitro 染色体異常試験、姉妹染色分体交換試験で陽性の結果であるが、in vivo 試験でいずれも陰性であるため、本物質は in vivo で変異原性を示さないと判断した。
発がん性:	EPA で C に分類されている (EPA (2002)) ことから、区分 2 とした。
生殖毒性:	ラットを用いた経口経路(強制) の 2 世代生殖毒性試験、マウスを用いた

経口経路(混餌)での連続交配試験、ミンクを用いた1世代生殖毒性試験において生殖能に影響はみられず、児に対してはラット及びマウスで体重に影響がみられたほかには影響はみられていない(NITE初期リスク評価書(2007)、環境省リスク評価第5巻(2006))。ラットを用いた経口経路(強制)での催奇形性試験においては、死亡を含む母動物毒性(25例中4例死亡、体重増加抑制、自発運動の低下、運動失調、振戦、攣縮、腹臥位姿勢、呼吸時の雑音)がみられる用量(450mg/kg bw/day)で胎児に側脳室拡張(1例)、軽微な骨格変異(5例)がみられた(NITE初期リスク評価書(2007)、環境省リスク評価第5巻(2006))。この試験では母動物の死亡が10%以上であるので不採用とする。ウサギを用いた経口経路(強制)での催奇形性試験においては、母動物毒性(異常呼吸音、眼脂、自発運動低下)がみられる用量において胎児にわずかな影響(表皮下の血腫(頭部)、胸骨骨化遅延)がみられた(NITE初期リスク評価書(2007)、環境省リスク評価第5巻(2006))。この試験では胎児にみられた影響が軽微であるので不採用とする。

ヒトの疫学において、クレゾールとクロロベンゼンあるいは塩化ホスホリルを使う工場で働く女性で女性ホルモン量変化と月経の異常、周産期死亡率と奇形発生率の増加したとの報告がある(NITE初期リスク評価書(2007)、環境省リスク評価第5巻(2006))。しかし、みられた変化はo-クレゾールばく露との関連性が明らかでないため分類に用いるには適当でない。

以上のように、2世代生殖毒性試験、連続交配試験において生殖に影響はみられていない。

特定標的臓器毒性、
単回ばく露：

ヒトにおいては、気道の刺激性を示し、蒸気やエアロゾルの吸入では鼻の狭窄感、乾き、咽喉の刺激症状、肺水腫を起こす。また、灼熱感、咽頭痛、咳、頭痛、吐き気、嘔吐、息苦しさ、息切れ、呼吸不全(咳、努力・頻呼吸)が報告されている。経口摂取では、嘔吐、腹痛、灼熱感、ショック/虚脱、出血性下痢、口、喉、胃の白色壊死病斑、経路不詳であるが、中枢神経系抑制、錯乱、蒼白、発汗、脱力感、頭痛、めまい、耳鳴り、不整脈、低血圧、浅呼吸、低体温症、呼吸不全を伴うショック、発作、意識不明、昏睡、心血管系、溶血性貧血、肺水腫、肺・肝臓・膵臓・脾臓・心臓・腎臓の損傷、代謝性アシドーシスがみられている。急性肺水腫は経皮ばく露によっても起こる(環境省リスク評価第5巻(2006)、ACGIH(7th,2001)、HSDB(Access on June 2014))。

実験動物では、マウス、ラットへの吸入ばく露では、マウスに粘膜の刺激、興奮、筋収縮、間代性けいれん、経口投与で、自発運動低下、流涎、協調運動失調、筋収縮、振戦、けいれん、呼吸困難、衰弱、嗜眠、昏睡、死亡がみられ、剖検所見として、吸入ばく露では、肺浮腫、肝臓の脂肪変性及び小葉中心性の壊死、腎臓の浮腫、糸球体の腫大及び尿細管上皮の変性、経口投与では、消化管の炎症、肺、肝臓、腎臓の充血及び出血が報告されている(NITE初期リスク評価書(2007))。

以上より、区分1(中枢神経系、呼吸器、心血管系、血液系、肝臓、腎臓、膵臓、脾臓)、区分3(麻酔作用)とした。

特定標的臓器毒性、
反復ばく露：

ヒトでは、本物質を含むクレゾール混合物の蒸気(濃度不明)に1.5-3ヶ月間、吸入ばく露された作業員7名に吐き気と嘔吐を伴う頭痛、うち4名には加えて血圧上昇、腎機能障害、血中カルシウム濃度異常、及び顕著な振戦が認められた(ACGIH(7th,2001)、DFGOT vol. 14(2000)、PATTY(6th, 2012))との記述がある。

実験動物では、ミンク又はフェレットに28日間混餌投与した試験において、区分2相当量(80mg/kg/day相当(ミンク:24mg/kg/day(ガイダンス値換算))、140mg/kg/day相当(フェレット:44mg/kg/day(ガイダンス値換算))で、肝臓相対重量の増加がみられたが、ラット又はマウスの13週間混餌投与試験では、区分2までの範囲内で毒性所見はなく、区分外の高用量(175mg/kg/day超)において、肝臓相対重量増加、貧血傾向所見(赤血球数減少、ヘモグロビン濃度減少)、神経症状(嗜眠、振戦、痙攣)がみられている(NITE初期リスク評価書(2007)、SIDS(2001)、ATSDR(2008))。一方、吸入経路では1用量のみの試験であるが、マウス1ヶ月間及びラット4ヶ月間吸入ばく露試験において、区分1に該当するばく露濃度(マウス:50 mg/m³(0.0056mg/L/6hr(ガイダンス値換算))、ラット:9mg/m³(0.006 mg/L/6hr(ガイダンス値換算))、呼吸器(上気道の炎症、肺の水腫、出血)、中枢神経系(自発運動減少、嗜眠、神経細胞及びグリア細胞の変性)、心血管系(心筋の変性、血管周囲の線維化)及び血液系(白血球数増加、骨髄におけるE/M(赤芽球系細胞/顆粒球系細胞)比の減少)への影響、並びに心筋、肝臓、腎臓の変性が認められている(NITE初期リスク評価書(2007)、SIDS(2001)、ATSDR(2008))。

以上より、ヒト(混合物)及び実験動物(本物質: o-異性体)の吸入経路での毒性情報を基に、区分1(中枢神経系、心血管系、血液系、呼吸器、肝臓、腎臓)に分類した。

吸引性呼吸器有害性: データ不足のため分類できない。

12. 環境影響情報

1)

水生環境有害性(急性):	甲殻類(オオミジンコ)の48時間LC50=5mg/L(EHC168, 1995)他から、区分2とした。
水生環境有害性(長期間):	急速分解性があり(20日間の分解度:86%(SIDS, 1998))、かつ生物蓄積性が低いBCF=10.7(SIDS, 1998)ことから、区分外とした。
オゾン層への有害性:	データがないため分類できない。

13. 廃棄上の注意

残余廃棄物:	<ul style="list-style-type: none"> ・廃棄においては、関連法規ならびに地方自治体の基準に従うこと。 ・都道府県知事などの許可を受けた産業廃棄物処理業者、もしくは地方公共団体がその処理を行なっている場合には、そこに委託して処理する。 ・廃棄物の処理を委託する場合、処理業者等に危険性、有害性を充分告知の上処理を委託する。
汚染容器及び包装:	・汚染容器を廃棄するときは、内容物を完全に除去した後に処分する。

14. 輸送上の注意

国際規制

海上規制情報:	IMOの規定に従う。
国連番号:	3455
Proper Shipping Name:	CLESOLS, SOLID
国連分類:	クラス6. 1(毒物)
副次危険性:	8
容器等級:	II

海洋汚染物質:	非該当
IBCコード:	Y類物質 クレゾール
航空規制情報:	ICAO/IATAの規定に従う。
国内規制	
陸上規制情報:	消防法、毒劇法の規定に従う。
容器:	危険物の規制に関する規則別表第3の2 毒物及び劇物の運搬容器に関する基準その3
容器表示:	指定可燃物 可燃性固体類、数量、火気厳禁 医薬用外劇物、名称、製造者の名称及び住所
積載方法:	運搬時の容器積み重ね高さは3m 以下
混載禁止:	第1類および第6類の危険物、高圧ガス
海上規制情報:	船舶安全法の規定に従う。
航空規制情報:	航空法の規定に従う。
特別の安全対策:	<ul style="list-style-type: none"> ・危険物は当該危険物が転落し、又は危険物を収納した運搬容器が落下し、もしくは破損しないように積載すること。 ・危険物又は危険物を収納した容器が著しく摩擦又は動揺を起こさないようにすること。 ・危険物の運搬中、危険物が著しく漏れる等災害が発生するおそれがある場合は、災害を防止するための応急措置を講ずると共に、もよりの消防機関その他関係機関に通報すること。 ・輸送に際しては、直射日光を避け、容器の破損、腐食、漏れのないように積み、荷崩れの防止を確実にこなう。 ・重量物を上積みしない。 ・食品や飼料と一緒に輸送してはならない。 ・車両等によって運搬する場合は、荷送人は運送人へイエローカードを携帯させる。
応急措置指針番号:	153

15. 適用法令

消防法:	指定可燃物 可燃性固体類(指定数量 3,000kg)
労働安全衛生法:	第2種有機溶剤等(有機則第1条第1項第4号) クレゾール 腐食性液体(労働安全衛生規則第326条) クレゾール 名称等を表示すべき有害物(法第57条、施行令第18条) クレゾール 名称等を通知すべき有害物(法第57条の2、施行令第18条の2) クレゾール
化審法:	優先評価化学物質(法第2条第5項) クレゾール
毒物劇物取締法:	劇物(指定令第2条)
化学物質排出把握管理促進法(化管法):	第一種指定化学物質 クレゾール
船舶安全法:	毒物類・毒物(危規則第2、3条危険物告示)
港則法:	施行規則 危険物・毒物類
海洋汚染防止法:	ばら積み運送における有害液体物質(Y類:クレゾール)
道路法:	車両の通行の制限(施行令第19条の13、日本道路公団公示)
航空法:	毒物(施行規則第194条危険物告示)
水質汚濁防止法:	指定物質(法第2条第4項)

16. その他の情報

参考文献

- 1) 製品評価技術基盤機構(NITE) GHS分類結果データベース
http://www.safe.nite.go.jp/ghs/all_fy.html
- 2) (一社)日本芳香族工業会危険物データベース登録値
- 3)ICSC(2008)

改定履歴

H14.12

見直し結果大きな改定なし

H16.7

様式の統一

H17.11

国連番号3455(固体)を追加

H18.12

JIS Z 7250:2005様式への改正

H20.2

見直し結果大きな改定なし

H21.8

化管法改定に伴う見直し

H22.7

化管法に関する表記の変更

H25.1

化審法改定に伴う見直しとJIS Z 7253:2012制定に伴う見直し

H26.1

化審法改定(優先評価物質;クレゾール追加)に伴う見直し

H27.4

JIS Z 7252:2014改訂に伴う見直しとACGIH許容濃度の変更

H29.3

危険有害性情報の更新

この SDS 標準モデルの作成者は(一社)日本芳香族工業会「SDS 小委員会」です。
記載した情報は会員会社の知見並びに参考文献等から抽出しています。
このSDS標準モデルの利用者は自己の責任において情報の採否をお決め下さい。